



います。便利なことが増え、合理的になったことで失ったものもたくさんあります。ここには、行きはバスで来られますけど、夜の公演を見るとバスがなくなります。すると、お客さんの中には「ちょっとそこまで送っていくよ」と言ってくれる人もいます。車中で作品の話をしたり、「どこから来たの？」だったり、不便だからこその濃密なコミュニケーションが生まれますね。

市長 劇場のことに話を進めます。私は20数年前に熊本県庁で文化行政に携わり、熊本県立劇場の担当になったことがあります。

鳴海 いい劇場ですね。

市長 当時、館長として元NHKアナウンサーでベストセラー『気くぼりのすすめ』の著者、鈴木健二さんをお迎えしました。熊本の文化創造のトップとして、伝承が危ぶまれていた神楽を復活させたり、アジアの青少年のオーケストラのキャンプを招いたりして、芸術をこの場所で作ってほしいと頑張っておられた。つまり、劇場というのは、特に行政が所有する文化ホールなどは、ただの貸館では駄目です。文化を創り出す場所にしないといけないということです。津市には津リージョンプラザのお城ホール、白山総合文化センターのしらさぎホール、サンヒルズ安濃のハーモニーホール、そして今、久居に準備しているホールの4つの大きなホールがあります。これらも同様に、芸術創造の場所にもしていきたいと思っています。

鳴海 素晴らしいですね。

市長 鳴海さんから見てホールとはどんな場所ですか。

鳴海 この7年くらい三重県文化会館が演劇に力を入れていて、全国的にも津市にある劇場は有名になったと思います。この津市ですずっと演劇活動と劇場運営をしていたNPO法人パンみえ(特定非営利活動法人パフォーミングアーツネットワークみえ)の油田晃さんや山中秀一さん、三重県文化会館の松浦茂之さん、この三人が官民共同で劇場から文化を発信していこう、津市、三重県のために文化的還元をしていこうと、はっきりとしたミッションを持って活動されていることは意義深い。劇場というのは他者と出会う場所です。今は日本でも多様な社会、寛容な精神を大事にする気風が高まってきましたが、自分の価値観とは違う作品を見るのは、嫌いとか好きを超えてこの人はどういうことを考えているのかとか、こういう体験が自分にとってどんな意味があるのかといったことを考える時間になるわけです。他者と出会い、価値観を広げる場所として劇場は機能していく。そのためにクリエイションし、発信していくことが劇場の重要なミッションだと思います。

劇場は想像力を働かせ 価値観を広げる場所!!

市長 美里の人たちからすると、この劇場によって今まで経験したことがないような出会いがあって、とても大きな刺激になりますね。

鳴海 この美里地域をご紹介いただいた時も、近くに家具作家の油田さんがいたり、写真家の松原さんがいたり、田舎暮らしを楽しく発信しているNPO法人サルシカさんがいたり、魅力的な人がたくさんいて驚きました。普通のガソリンスタンドだと思っていたら、経営者の稲垣さんはITのプロフェッショナルだったりします。そういう特殊な方々がたくさんいる地域というのは、なかなか珍しいと思いますし、私たちにとっても刺激になります。

市長 美里には地元の小・中学生で構成された「美里子ども劇団」があり、人権フェスティバルなどのイベントで演劇を披露しています。鳴海さんには演技の指導をしていただいているのですが、子どもたちの反応はいかがですか。

鳴海 本当に元気がいいですね。いろいろな地域で、高校生や大学生と接する機会はありましたが、なかなか小学生と接する機会はありませんでした。私たちが引っ越してきた2014年から演技指導に関わり、今年で3年目になりました